資料１ 別紙②

No.20　適正な利用・エコツーリズムの推進　調査結果まとめ

本資料は、モニタリング項目No.20 調査シートの結果を簡易的にまとめたもの。

2019年度に実施した知床遺産地域利用団体への聞き取り調査において、対象とした11団体中９団体が「知床エコツーリズム戦略５．基本方針（１）基本原則」である「遺産地域の自然環境保全」、「良質な自然体験の提供」、「持続可能な地域社会と経済の構築」に該当する活動を行っていると回答しており、エコツーリズム戦略の趣旨を理解・尊重した活動が展開していると判断できる。

具体的には、「観光船のエンジンやスクリューに自然及び野生動物に配慮したものを使用している」「ツアーを通して利用者に自然に関する知識を学んでもらえるよう努力している」「知床五湖利用調整地区による利用のコントロール」など、自然環境への配慮に関する取組は行政・事業者問わず実施されている。また、ツアーに漁師とのふれあいや博物館の訪問等を取り入れ、地域の文化や歴史への理解の推進を図る事業もある。

利用者や参加者数については、「減少している」との回答はなく、「増加している」との回答が多かった。知床国立公園の利用者数そのものは増加傾向にないことから、エコツアーや特定のアクティビティへの参加者が増加している可能性がある。

利用者意識や客層の変化については、「羅臼湖利用者について、昔に比べて路上駐車が減った。またゴミも少なくなった」「自然環境への配慮は充分に理解されている」「知床を知るにはガイドが必要と言う認識が定着してきた。」「連泊客が増加した」などポジティブな変化の意見がある一方、「人間側もクマへの警戒が薄れてきている」「知床に行けばクマを気軽に観られると受け取られている。」など野生動物との関係性についてネガティブな変化が確認できた。

フィールドや地域の自然環境については、全ての団体が「気になることや心配なことがある」と回答しており、保全に対して強い関心を持っていることが窺える。主な懸念事項として、野生動物との軋轢、外国人対応の不足、利用の集中による生態系への影響（野鳥の営巣妨害等）等が挙げられた。また、「海水温の上昇」「暖冬による積雪の減少」「野生動物の行動変化」など気候変動に対する影響の懸念が共通しており、こうした現象が各活動に影響していることが確認された。

また、交通システムの課題(二次交通、マイカー規制等)、制度やシステムの複雑さ、利用できるフィールドのバリエーション不足等の課題が指摘されているが、すべて外国人対応の課題に関連していることが特徴的といえる。

モニタリング項目 No.20 とりまとめ状況

1.　対象団体

エコツーリズム検討会議の構成員や提案事業に取り組む11団体を対象に、資料1－3に示した調査シートの内容について聞き取り調査を行った。

No.	団体名	No.	団体名
1	環境省	7	知床小型観光船協議会
2	林野庁	8	知床羅臼観光船協議会
3	斜里町役場	9	知床財団
4	羅臼町役場	10	知床ウトロ海域環境保全協議会
5	知床ガイド協議会		
6*	知床斜里町観光協会 知床五湖冬期利用促進事業検討部会	11*	知床羅臼町観光協会 赤岩地区昆布ツアー部会

*調査対象が重複したため、1団体として聞き取りを行った。

2.　結果

①「知床エコツーリズム戦略」の基本方針について

【基本原則】	該当
遺産地域の自然環境の保全とその価値の向上に貢献している。	9団体
世界の観光客への知床らしい良質な自然体験を提供している。	9団体
持続可能な地域社会と経済の構築に役立っている。	9団体

【エコツーリズムを含む観光利用の推進にあたって必要な視点】	該当
事業、ツアーが、地域主体・自律的・持続可能である。	9団体
事業、ツアーでは、共有・協働・連携などのネットワークが構築されている。	9団体
自然環境の保全に配慮している。	10団体
利用者の自然生態系に関する理解が促進されている。	8団体
事業及びツアーが、 地域の文化・歴史的背景を踏まえて実施されている。	7団体
利用者へ自己責任の原則が認知され、管理責任の分担が行われている。	5団体
事業、ツアーは知床のブランド価値を高めるという視点がある。	8団体
事業、ツアーは順応的管理型で実施されている。	7団体

【「該当」と回答しなかった者の意見】

- ツアー等の実施主体でないため回答できない項目があった。
- 戦略をよく知らない。設問の意図が分からない。
- 対象事業が広すぎて回答が難しい。

「知床エコツーリズム戦略」に則り、特に力を入れて取り組んでいることや、新たに始めた取組があるか
● 知床五湖利用調整地区の立入規制期間を変更（自由利用期→植生保護期）することとした。 ● 新たに取り組んでいることは事業の中ではないが継続的に事業に取り組んでいる。 ● 近年流氷に対する関心が高まり、ドライスーツを着用しての「流氷ウォーク」に参加はハードルが高い人に対しての安全に流氷とふれあうツアーを企画、プラス知床博物館でオオワシ・オジロワシを見学後、知床の歴史及び知床の古代文化を見てもらうツアーが好評。 ● 情報共有について、海上状況はもとより、動物の確認場所の共有に力を入れ乗船客のニーズにできるだけ応えられる環境づくりに取り組んでいる。 ● 観光船のエンジンは環境に配慮したものを使用している。スクリューもクジラやシャチに配慮したものを使っている。 ● 外国人向けの登山道地図の発行 ● リアルタイム観光情報共有システム「知床情報玉手箱」の管理運営。これを通じた地域関係者との観光情報の共有。外国人を含めた観光客への情報発信。 ● 知床自然センター等拠点施設のリニューアル。 ● ケイマフリなど海鳥の保護と利用の両立を目指し、知床の価値を高める活動を行っている。特に、海鳥の調査の結果に基づいて保護と利用を行っている。

②エコツーリズムに関わる利用者･参加者の数や意識、行動の状況について

利用者・参加者の数	
増加している	7団体
減少している	なし
どちらともいえない・未回答	4団体（取扱う施設・ツアー数等が多く一概に言えない）

利用者・参加者の意識	
変化している	4団体
変化していない	なし
わからない・未回答	7団体

利用者･参加者の数や意識、行動について、気付いた点や気になる点はあるか
● クマの人慣れが進んだ結果、クマが人間をあまり気にしないので、人間側もクマへの警戒が薄れてきているように感じる。 ● 羅臼岳登山者（ウトロ側、羅臼側ともに）について、外国人が多くなってきた。外国語の対応が不十分で、マナー啓発のための看板がないため、羅臼平での焚火跡があるなどの問題な行動も見受けられる。ピクトグラムや外国語看板の整備が必要。 ● 羅臼湖利用者について、昔に比べて路上駐車が減ったイメージ。またゴミも少なくなったと感じる。(60代GSS) ● 自然環境への配慮は充分に理解されていると感じる一方で世界遺産に関する知識はあまり無いように感じるが、ツアーを通して理解している様に感じる。 ● 漁師やガイドの話をメモする人や、ツアーをもっと多くの人に知ってもらいたいという利用者が多くなってきている。 ● 知床を知るにはガイドが必要と言う認識が定着してきた。また知床は１日という時間では無理という認識の常連泊のお客の増加傾向にある。これは観光に携わる人達の努力の成果だと思う。 ● 知床好きのリピーターはある程度おりますが、まだ全体としてはそんなに増えているとは思わない。知床リピーターをこれからどのように増やしていくかが課題である。 ● 知床はまだクマ観光の要素がつよくその為の色々な問題を多く抱えている。ニュース報道でクマが道路脇に出没で危険と言う情報が一般の人には「知床に行けばクマを気軽に観られる」と受け取られる。ひとつ間違えば大事故につながりかねないので、「知床ルール」というのが必要になってくる可能性がある。 ● 連泊客が増加した影響もあり、当日予約者が増えてきているように感じられる。天候を見て乗船を検討する人や、現地についてから何をするか決定するなど。 ● 日本中にシャチを見たいという人が多くなり、更にリピーターも増えた。 ● 施設の入り込みは概ね増加傾向。 ● 利用者数も大切だが、数の増減だけで判断・評価しがちな印象を持つ。保全と利用の観点からは滞在時間や消費額、満足度などの指標が重要であり、これらの定期的・定量的な調査が不十分と感じている。また、外国人の動態に関する知見も不十分であるのかが課題。 ● 利用者意識や行動については、訪問の動機や期待する体験が多様化していると考えられる。ニーズが多様化している一方、フィールドやアクティビティのバリエーションや質が追い付いていないのが現状。 ● 管理責任や安全対策、管理の縦割りなどが弊害となり、自然の中でより深く、より自由に楽しむ場所や機会が減少していると感じる。

③ツアーで使用しているフィールドや地域の自然環境について

気になることや心配なことがある	11団体
気になることや心配なことはない	なし

- クマによる人身事故のリスクが高まっていること。
- 海岸ゴミの問題について、特にルサ側の海岸巡視時に、漁具等の産業ゴミが多く、景観所良くない状態である。
- カムイワッカ湯の滝について、落石の危険性があるとしている通行止め区間について、現地調査以来、事業が進んでいないことから、通行できるよう対応が必要。
- 人間側の問題もあるが、ヒグマの人慣れや住宅地への出没など、人間の財産に被害が発生しており、いつ直接的被害が発生してもおかしくない状況である。一方で、海獣類の漂着が増加しており、衛生的な問題だけでなく、ヒグマが餌付くなど危険な状況が増加することが懸念される。
- キタキツネ、エゾタヌキ、オオセグロカモメなどが生息地または営巣地として住宅地周辺を利用している。人間に攻撃する被害、騒音や糞による被害、エキノコックスや狂犬病の感染が懸念される。
- 事業やツアーがしにくい行政においては、このアンケートでは記載が困難である。
- 暖冬によるツアー実施日の短縮。
- 年々ヒグマ出没が増えているなか、十分なスタッフが必要だと思います。
- 観光客増加に伴うツアー数の増加により、ツアーコースの一極集中が顕著になっていきている。
- 近年の温暖化の影響かもしれないが、強風による倒木が増えてきている。近年の湿った重い雪が降り樹木に積もった雪が風で飛ばず、そのため風を受け樹木が倒れたり、折れたりするためと思われる。鹿の樹木の食害で樹木が枯れ、風が通りやすくなったことも一因と考えられる。
- 鹿を減らしたことにより、植物の復活が多く見られ、花が増えてきている。只、鹿が笹の新芽を食べなくなったことにより、笹が高くなりクマが隠れやすくなっている気がする。
- 春先の雪解けが早くなりクマが穴から出てくるのが早くなると、クマの春先の餌が心配。前はよくクマが取った鹿を隠した土まんじゅうなどが見られたが今はあまり見られない。（残雪があればしかを捕まえられるが雪がないと狩りが難しくなる。）
- 海水温の上昇に伴い、魚やそれを捕食する海鳥に変化がいつ大きく現れるか分からない。事業者として自然への負荷をできる限り軽減したいと望んでいるが、双方のバランスがとれているとは考えにくく、取り組む規模としてはあまりにも大きすぎる。
- 漁業境界線は超えないよう気を付けて運航している。
- 気候変動の影響については、長期的に大きな課題。知床においては気候の激化という形で表面化しつつあるように感じる。極端な寡雪や豪雨などが目立っており、フィールドの維持管理や情報提供においても、適応策が必要。

- ヒグマとの軋轢はあらゆる場所で課題。観光面においては遭遇件数の増加や人馴れの進行という形で表面化しており、この傾向は当面継続するものと考えられる。ヒグマの動態や個体数をコントロールすることは現時点において技術的、社会的に難しい状況であり、利用者側の意識や行動の改善、管理システムの改善が必要。
- 利用者の集中するエリアと道路沿線においては、レクチャー等の情報提供やシャトルバス等によるアクセスコントロールは有効な手法と考えており、導入・拡大に向けた政策立案と合意形成が必須な状況。ただし、これらは利用者ニーズを充足し、フィールドのバリエーションや利用の自由度の拡大を約束するものでなければ受け入れられないものと思う。知床五湖での取り組みは、こうした課題について一定の成果があり、知見も集積されていると考えられる。
- 登山道や先端部地区等のバックカントリーの利用については、外国人も含めて一定のニーズが見込まれる一方、安全対策や環境保全の観点からの情報提供や受け入れシステムが必要です。海域を含めたこうしたフィールドは、知床の核心であることから、ルールや制度による保全担保が必須である一方、知床のシンボルとして強い発信力とブランド形成に寄与する可能性がある。
- ガイドツアーについて、フレペの滝や知床五湖は管理されていると思われるが、その他の象の鼻や男の涙などの場所はどのように管理されているのか。ガイドそれぞれが秘密の場所のようなコースがあり、クマゲラや猛禽類などの希少生物や踏圧の影響がないか心配である。
- 知床自然センターの駐車場拡張について。知床自然センターや 100 平米運動のきっかけは、知床伐採問題であると考える。全国から知床の森を守ろうと多くの人達が集まった。その知床において自動車での利用者の増加や五湖のバス利用のために駐車場内や自然センターの前側の林を全て伐採して工事を行った。これは、由々しき事態であり非常に残念な行為である。利用の利便性を優先するあまりに林を皆伐するとは、世界自然遺産・国立公園において、あってはならない行為である。駐車場を拡張するにも他に方法はあったはず。

④その他（外国人の動向、エコツーリズムに対する意見等）

- エコツー戦略に基づく提案数が少ないことが気になる。提案者のメリットをもう少し打ち出せると良いのではないか。
- 外国人登山客の利用状況について、昼過ぎなど、中途半端な時間帯に軽装で山の中腹を登っている利用者をよく見かける。登山に対する認識のずれを埋めるための工夫が必要（山小屋はないことや、天候、リスクの情報発信など）。
- ヒグマによる交通渋滞や危険事例が発生し、社会的な問題として注目が集まっており、野生動物との軋轢解消が課題であり、カムイワッカ地区をはじめ園地の魅力向上が必要。
- 羅臼町市街地を歩いている・無料温泉の利用・飲食店を利用している欧米人を見かける一方で、コンビニについては、アジア圏の利用が多い。ただし、必要最低限のお金で（観光船等、自然を観察するためにはお金を利用している）観光している様に感じる。
- 今後エコツーリズムで観光地として羅臼町を強く推していく場合、現状の制度では問題が発生する可能性が高い。そのため、現状できることから物事を進め、最終的に自然保全を考慮した観光で羅臼町が繁栄してくことが理想である。
- 外国人旅行者は前年並み。宿泊ベースで全体の 10%程度(11 月末現在)。流氷時期の伸びに期待する。国別では欧米系が若干増えている。
- 世界的に昆布が有名になってきているのを利用し昆布を通して知床のエコツーリズムを伝えていくことができるのではないかと思っている。
- インバウンドに関しては、アジア以外のお客が増えている気がする。個々での対応には限度があるので、知床としてのインバウンド対応の窓口が必要だと思う。
- 知床には規制で入れない箇所がある。ルシャ・半島先端部等貴重な自然があるからとの理由等で入れないが、一般の人には何が貴重で入れないのかが分からない。例えば年に 2～3 日間 1 日 10 名前後の人を事前応募で案内して「このような貴重な自然があるので規制しています」と理由を理解してもらう事がこれから大切と思う。その代わりそれなりの金額一人 10 万円でももらうべき。インバウンドが増えている理由の一つに、日本は何でも安いとの理由がある。
- 新しいフィールドコースが必要(例：ポンホロ(国民健康保安林)から開拓跡地(自然教室キャンプ場)自然センターまで)。ポンホロ入口はＳ字カーブで狭く駐停車が危険のため、バスの羅臼線のポンホロ入口付近にバス停を新設してもらう。
- 総合的な情報発信と利用の促進について検討していただきたい。利用者へのメリットについても周知・利用ができる環境を願う。
- 定期路線バスの羅臼ウトロ線の時刻や便数を変更する必要がある。ウトロから羅臼の路線バスができた頃はまだ羅臼で観光船を営業していなかった。現状は、ウトロ宿泊で羅臼の観光船に乗りたい場合、マイカーやレンタカーしか観光船に乗れない。羅臼発の路線バスの最終出発時刻を 16:00 にしてほしい。
- 外国人については増加傾向が続いているが、施設やフィールドによるばらつきが大きい。

こうした傾向を把握したうえでの対策が必要ですが、信頼できる統計が少ない。

- 外国人といっても、国や個人属性によりニーズや意識などは多様であり、その幅がより広くなっているのが現状。また、外国人は知床だけではなく、本州も含めて周遊的な利用形態が主流。知床を訪問するにあたっては、トレッキングなどの自然体験や野生動物観察などの体験を期待する傾向が強い一方、こうしたニーズに充分に対応しきれていない。
- 制度やルールは重要ですが、これを的確に伝え、理解していただくことがより重要。そのような意味で、「わかりやすさ」や「合理性」などへの配慮が求められる。「五湖の利用調整地区の制度」「マイカー規制の乗り換え場所（五湖まで車両乗り入れできるにも関わらず、乗り換えできない）」「羅臼湖のルール」などについては、外国人に説明し、納得いただくのが難しい内容もある。
- 外国人観光客が来られても恥ずかしくない「知床」にしたい。